HAPPY NEWS

No.1

新聞は、セレンディピティー。
それは想像もしていなかった出合い、発見、感動、
気づきの連続。新聞って、人生が豊かになり、
社会がHAPPYになる魔法の紙…。
今日も新聞をめくって、偶然の出合いを楽しみませんか。

ハッピーは、毎日、みつかる。

今年も日本新聞協会は、４月６日の「新聞をヨム日」にあわせ「ＨＡＰＰＹ ＮＥＷＳ ２０１４」を発表します。今回は家族での取り組みや若い方からの応募が増え、前回の２倍以上となる４９７５件（うち大学生１１０３件）の応募がありました。

プロテニスプレーヤー・錦織圭さんの活躍や、地域の行事にまつわる記事のほか、写真、広告、投稿にも多くのコメントが寄せられました。

全国の新聞・通信社で構成する委員会が２次にわたって行った審査の結果、ＨＡＰＰＹ ＮＥＷＳ大賞１件、ＨＡＰＰＹ ＮＥＷＳ賞２０１４を10件、大学生大賞（グループ）１件、大学生大賞（個人）５件、家族賞４件などを決めました。

大賞の作品（２ページ）は、若い人が真摯に仕事に向き合っている記事を自分に引きつけて、素直に感心した気持ちを表現した点が高く評価されました。

新聞を通して読者にやさしい気持ちや感動を届けてくれたＨＡＰＰＹ ＮＥＷＳ ＰＥＲＳＯＮには栃木県日光市の池田家の皆さま（３ページ）、将棋棋士４段の今泉健司さん（９ページ）、ＰＥＲＳＯＮ特別賞には錦織圭さんが選ばれました。

今回から、ゲスト審査員として放送作家・脚本家の小山薫堂さん、アートディレクターの森本千絵さん、シンガー・ソングライターのｍｉｗａさんを迎え、ゲスト審査員賞も新設しました。

新聞が事件や事故だけでなく、温かな気持ちになるニュースも届けていることや、「気づき」のメディアだということを皆さんに知ってもらえればうれしいです。

CONTENTS

HAPPY NEWS 2014
HAPPY NEWS 大賞 ―― 2
HAPPY NEWS 賞 2014 ―― 3
HAPPY NEWS 2015
募集要項
スクラップブッキング紹介 ―― 7
大学生大賞（個人）
大学生大賞（グループ） ―― 8
第５回いっしょに読もう！
新聞コンクール ―― 10
ゲスト審査員賞
小山薫堂賞・森本千絵賞・miwa賞 ―― 12

写真提供：IMG

錦織 圭さんのコメント

このたびは、HAPPY NEWS PERSON特別賞という、うれしい称号をいただき、ありがとうございます。昨年は、全米オープンで準優勝、世界ランキングも5位まで上げることができ、自分にとってもハッピーな年でした。でも、それ以上に、自分の活躍が読者のみなさんをハッピーにできていたなら、本当にうれしいことです。今年も、新聞で大きく取り上げてもらえるよう、そして読者のみなさんをハッピーな気持ちにできるように頑張ります。

HAPPY NEWS PERSON 特別賞

２０１４年９月に開かれたテニスの全米オープンで、準優勝した錦織圭選手。２５歳の若者が世界で活躍する姿は、多くの人に勇気と感動を与えました。活躍を伝える新聞記事をもとに、たくさんの応募も寄せられたことから、錦織選手にHAPPY NEWS PERSON特別賞を贈りました。

HAPPY NEWS キャンペーンとは

新聞を読んで、ＨＡＰＰＹな気持ちや、新たな気づきを与えてくれた記事と理由を募集するキャンペーン。日本新聞協会が２００４年度から始め、今回で11回目。入賞作をまとめた「ＨＡＰＰＹ新聞」は、今回から「ＨＡＰＰＹ ＮＥＷＳ」に改称。森本千絵さんに依頼して、デザインを一新しました。キャンペーンの詳細は新聞ＰＲウェブサイト「よんどく！」（http://www.yondoku.com）をご覧ください。

記者の目

鹿屋総局・小田裕徳

「高卒の採用予定はなかったけど、急きょ採用試験をすることにした」。鹿屋市内の会社経営者が語り始めた。ある高校3年生の言葉がきっかけだった。彼は会社の作業車が給油するガソリンスタンドで家計の助けにアルバイトをしている。

その彼が給油中、社員に「おたくの会社は高卒の採用はないのですか」と聞いたという。後日、別の社員も同じ話を社長に報告した。「なぜわが社に入りたいのだろう」。気になった社長は別の社員に聞いてもらった。

すると、「どの社員の作業車も、道具類がいつも整頓されている。こんな先輩たちのいる会社で頑張りたい」と語ったという。驚くような動機。

「整頓されているから」

「高校生が車内の整頓状況を見て、一生の仕事にわが社を選ぶなんて」。社長は心動かされた。「将来、会社を支える人材に育つのでは」と会ってみたくなった。

急きょ求人手続きへ。採用試験は9月下旬だった。成績は優秀。さらに面接で親思いの優しい面を知り、社長は即座に採用を内定したという。

社長は、彼の話を会社の朝礼で紹介した。「誰がどこを見て評価するか分からない。みんなが車内を整頓しているから、高校生にも信頼された。仕事の中身も同じ」と。いつもそんな思いで仕事をしているだろうか。会社の質と信頼度は、こんなところに表れるのかもしれない。

HAPPY NEWS 大賞

時間がなくいつもはさっと通してしまうような小さな記事でしたが、この日の記事はなぜかさっと目に入ってきました。「整頓されているから」

家計を助けるためにガソリンスタンドでバイトをしている高校生が、給油にきていた会社の方に高卒の採用はしないのかと尋ね、整理整頓されている作業車をいつも見ていて、自分もこんな整理整頓ができている先輩たちのいる会社で頑張りたいとのことでした。自分の会社にこんな理由で入社したいと話した高校生に心を動かされた社長は急きょ求人手続きを行い、この高校生のさらに優しい面をしることができたそうです。

誰がどこを見て評価しているかわからない、この話を読んだ後、自分はどうだろうかと考えさせられました。どんなに立派なことを言っていても、ふだんの行動を他の人が見たときにどう思われるかだなと改めて思いました。

この高校生のことばを社員の方が社長に届けたこともうれしく思いました。

古垣 ひとみ さん　41歳　鹿児島県

南日本新聞 2014年10月9日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS賞 2014

２014年2月。私の地元、山梨は120年ぶりの大雪に見舞われました。雪国かと思うような雪の高さに言葉が出ませんでした。交通網はまひし、陸の孤島となった山梨。観光客も足止めを余儀なくされました。地元住民は、朝から連日の雪かき。私も仕事場に行けず、雪かきを続けました。もう雪を見るのも嫌だと思いました。

ですが、いいこともありました。雪かきを通して、普段あまり話すことのない近所の人とたくさん会話をしたり、顔を見たことのない人とも協力して道をつくったりすることができました。それがきっかけで、その後の交流も生まれました。

この新聞記事も雪かきを通しての心温まるエピソードです。雪の中にこっそりクリアファイルに手紙を入れておく粋な計らい。きっと見つけた方は、驚きとともにうれしさがこみあげてきたでしょう。そして、一緒に雪かきをした人の顔を思い浮かべ、また会いたくなったでしょう。言葉で伝える「ありがとう」以上の、思わず笑顔がこぼれる絆が生まれたエピソードだと思いました。

武井 恒 さん　32 歳　山梨県

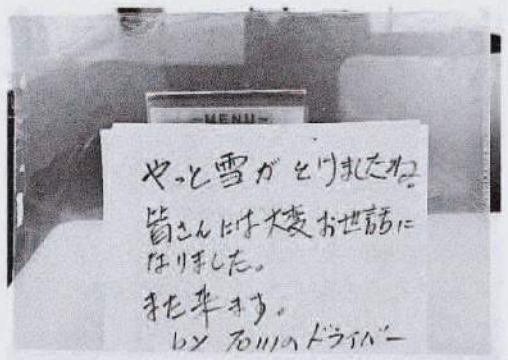
山梨日新聞 2014年3月13日付朝刊を読んで

「やっと雪がとけましたね。皆さんには大変お世話になりました」―。笛吹・石和温泉のホテル駐車場の雪の山から、そんなメッセージが見つかった。２月の大雪時に同所を訪れて足止めされた観光バスの運転手が、従業員と一緒に雪かきをした際に、雪解け後に現れるようにと残していったもの。ユニークな感謝のメッセージを受け取ったホテル関係者は、再会を心待ちにしている。〈野口健介〉

大雪で足止め 石川のバス運転手が〝置き土産〟

雪の中から感謝の手紙

石和のホテル、10日後に発見



戸田英生さんが書き残した手紙

メッセージを残したのは、石川県加賀市の京福リムジンバス運転手戸田英生さん（54）。北陸3県のツアー客40人を乗せ、14日にホテルふじ（蔵林澄子社長）を訪れた。大雪で乗客と共に足止めされ1泊の予定が3泊し、中央自動車道の通行止めが解除された17日深夜に帰路についた。

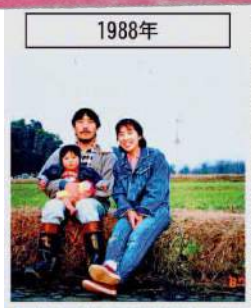
戸田さんは連日、スコップでホテル従業員の雪かき作業に協力した。「自分たちのために総出で雪をかいてくれた従業員の姿に心を打たれた」と言い、感謝の気持ちを伝えようと、17日の雪かき作業中に雪の山にクリアファイルにとじたメッセージを残した。

見つかったのは10日後の27日。従業員の三科匡弥さん（21）が駐車場で雪かき時、高さ1㍍程の雪の山にスコップを差し込むと、中から出てきた。「by石川のドライバー」として、感謝の言葉とともに「また来ます」と書かれていた。三科さんは「毎日雪かきを手伝ってくれた戸田さんだとすぐに分かり、温かい気持ちになった。再会したらお礼の言葉を伝えたい」と話している。

年賀状 同じ場所で30年

栃木県日光市 池田さん一家

母親を間に挟んで2015年の年賀状用の写真撮影をする池田さん夫婦（栃木県日光市で）



栃木県日光市猪倉の農家、池田正光さん（58）は、結婚した1987年以来、毎年自宅近くの同じ場所で家族を撮影した年賀状を送り続けている。まとめて見るとそれぞれが年を重ね、成長していく様子が分かり、まるで家族の物語のようだ。池田さんは「平和な日々が続くことを祈って今後も続けていきたい」としている。

家族の歴史 物語のように

この場所で…そして15年は⇩

87年のはがきは、池田さんと妻の典子さん（51）と2人だけ。やがて長女、長男、二男が誕生し、次々と写真の中に収まっていく。途中、父親の他界などで数年間は年賀状用の撮影はしなかったものの、30年近く池田家にとって恒例のイベントとなってきた。

写真は毎年、12月に撮影する。自宅近くの収穫後の田んぼを背に、セルフタイマーで撮影する。カメラに向かってほほ笑むことで、仲の良い一家の雰囲気を伝えている。送ることが目的の年賀状なのでこれまでは手元に残っていなかったが、貴重な記録になると考え、数年前から回収を試みた。「面白い年賀状なのでまとめて取っておいた」という人も多く、すぐに全てのはがきが集まったという。

来年は、子どもたちが20歳を迎えたことで一応の区切りが付いたとして写真には収まらなかった。その代わり、介護している正光さんの母、愛子さん（94）と共に撮影した。子どもたちがいない年賀状について「寂しい思いもありますが、仕方ないですね」と成長を振り返る。

池田さんは、農業の傍ら、典子さんと一緒に認可外保育所「きらきら保育園」を運営する。農業体験などを通してのびのびと子どもを育てるのが園の方針だ。子どもたちの健やかな成長と、心穏やかな日々の大切さを痛感しているという。

毎回、写真に添える言葉も味わいがあると評判だ。２０１５年の年賀状にはこんな言葉を添えた。

『そう言えば大好きな父の話をしなくなった今年95歳になる母と手を繋（つな）いで歩く　そんな僕も今年は還暦、小さな頃を思い出し、そして家族みんなで寄り添っています　子ども達と穏やかな日は手を繋いで散歩する妻　何時（いつ）もの光景です　そんな淡々と過ごす日々が心にしみます　だから今年も言い続けます　世界が平和でありますように　猪倉から愛を込めて』（とちぎ）

池田家の皆さまのコメント

初めに、このような素晴らしい賞をいただき、ありがとうございます。

30年前に知った「世界で一番の写真集は家族のアルバムである」。その言葉を胸に、世界の日本の片隅の猪倉（栃木県日光市）で、平和であればこそ当たり前に家族みんなで、元気に生きているぞということを、年賀状という形で伝えられて良かったです。

30年間、同じ場所で年賀状の写真を撮影されている日光市の池田さん一家の記事が目にとまりました。

大変なことも多かったでしょうが、1年1年、家族の歴史を刻んでこられたのでしょう。わが家も今年で結婚30年。池田さんと同じく、子供も3人(男2人、女1人も一緒です)。みな成人し、それぞれの道を歩んでいます。小さいころ、私たちのまわりを走り回り、笑いころげたり、泣いたり、そんな日々が本当に愛しいです。池田さんも子供さんが増えていき、そしてだんだんと巣立っていき、今年はお母様を真ん中にして撮影されているのを見て、何か深いものを感じました。

毎日、家族のために明るく、元気に働いてくれている主人に改めて、感謝の気持ちを思い起こさせてもらった。そんな記事でした。ありがとうございました。

恵川 道子 さん　53歳　広島県

日本農業新聞 2014年12月28日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS 賞 2014

「私も会いに行こう」。ひとりでに笑いが出て、そう思った。

高知新聞に載った北川村島地区のかかしさんである。新聞に載っている写真に収められたかかし。よく見ると、写真の中で生きた人間はかかし作りの上村さんと妻の２人。「２６人の集落“１２人”増」の記事を何げなく読んで初めて気づいた。それくらい本物そっくり。親子で自転車に乗っている姿。仲良しおばさんが椅子に腰かけ、何やら楽しそうに話している後ろ姿が目の前に広がる。

カメラに収まってないものに、リヤカーを引くおじさんや、トラクターで土を起こすおばさん…。何も知らない住民が、「こんにちは…」と声をかけても反応なく、のぞき込んで初めてかかしだと気づき、笑顔になるとのこと。

読んだだけで想像でき私もハッピーな気分になる。リアルなだけに「夜は怖い」との声で、夕方にはしまい、翌朝に配置を変えて再登場するというのも、またいい。今まで見たかかしは、いつも同じ場所にいた。それがここでは毎日の配置変えで、「今日はここにおるが？」と、集落の人々がつい声をかけたくなるのだろう。

この集落も過疎と少子化が進み、高齢の独居老人や夫婦二人暮らしが多くなっているはずだ。そんな中で、自転車に乗った子どもの姿に「おはよう」と声をかけたくなる気持ちがよくわかる。私の故郷も同じことだ。

きっと今では、それぞれのかかしに名前がついていることだろう。地区の人口を超すのが目標と、かかし作りを続けている上村さん。上村さんの優しさと情熱に、心から拍手を送りたい。

三谷 千代美 さん　72歳　高知県

高知新聞 2014年5月19日付朝刊を読んで

26人の集落“12人”増

北川村島地区

Uターン男性 かかし制作

奥のオレンジ色のポロシャツを着ているのが上村尚幸さん。左から２番目に座っているのは妻の孝子さん（北川村島）

【中芸】県内の各自治体が人口減対策に取り組む中、26人が住む安芸郡北川村の島地区では今春、12人の“人口増”を果たした。といっても正体は、ユズ農家の上村尚幸さん(69)がせっせとこしらえたかかし。庭先にたたずむリアルな姿に、通り掛かる人が次々に「おはよう」とあいさつしては、「おおの、だまされた！」。約7割が高齢者の山あいに、笑顔があふれる。

（浜崎達朗）

「住民より多くしたい」

上村さんは自動車部品の営業マンとして四国を飛び回り、定年後の7年前にUターン。民生委員として地域を回ると、かつてユズ栽培などで栄え、100人を超える人が住んでいた古里は、人の姿をほとんど見掛けない状態になっていた。

かかしをつくり始めたのは3月。「地区の人を楽しませたい」という一心だ。農作業の合間に杉の枝で骨組みをつくり、新聞紙で肉付けして服を着せる。

リヤカーを引くおじさん、トラクターで土を起こすおばあさん、自転車に乗る親子…。これまでにできた12体はそれぞれに役割を担い、4月から上村さんの庭に並んでいる。

何も知らない住民が「こんにちは、今日はちっと暑いね」と声を掛けても、相手の反応はなし。のぞき込んでかかしと気付くと「何じゃこりゃ」と笑顔になる。こんな光景が広がり、「してやったり」と上村さん。

2年前に89歳で亡くなった母、宮子さんの服をかかしに着せたら「腰が曲がったところまでそっくり。おばあちゃんが生き返ったみたいやねえ」と、さらに笑顔があふれた。

ただ、リアルなだけに「夜は怖い。こらえて」との声も。このため上村さんは毎夕5時半にかかしを抱えて倉庫にしまい、翌朝8時に再登場させる。配置は日々変わり、そのことがまた「並びが違うね」と話題に。

重労働も何のその。上村さんは「地区の人口を超すのが目標。地区の人の笑顔を増やせれば」と、かかしづくりを続けている。

日本全国各地で過疎化対策が行われている昨今、同じ過疎化に悩む山口県周防大島町のユーモアあふれる策を見つけた。

それは薬に見立てて中身はラムネ菓子1粒という単純さ。その名は「シマグラシＳ錠」。さらに架空の成分として「トカイハモウタク酸」が配合されているとのこと。一見、単純に思えて実は良く考えられている。

「シマグラシＳ錠」や「トカイハモウタク酸」などのネーミングが実にユニーク。この記事を見た時「これ菓子じゃなくて、本当の薬じゃないの」と思ったほどだ。

それと小箱の裏面に書かれた“効能”「何もない暮らしに不満を持たなくなります」と「真っ暗な夜が平気になります」がたまらなくにくい。

この発案者の泉谷さん自ら2007年、家族の健康状態を考え大阪から妻の実家がある同町に移住している。当初はコンビニも近くになく不便を感じていたらしい。子どもが誕生してからは、自分の孫のように可愛がってくれる住民らの温かさなどに、今では暮らしを満喫しているとのこと。

これを契機に「シマグラシＳ錠」が島に住みたくなる“特効薬”になればと切に願う。

川口 辰雄 さん　62歳　福岡県

読売新聞 2014年10月4日付夕刊を読んで

島移住 促す〝特効薬〟

「シマグラシＳ錠」 中身はラムネ菓子

山口・周防大島町　都市部で配布

過疎化が進む山口県周防大島町が、都市部からの移住を促す〝特効薬〟にしようと、東京や大阪で開かれるイベントなどで配布するユーモアあふれる記念品「シマグラシＳ錠」を作った。薬に見立てているが、中身はラムネ菓子1粒。町は、「トカイハモウタク酸」という架空の成分が配合され、都市部の「サービス依存症」からの脱却に効果があるとうたっている。

（木村歩）

町は2012年度から定住促進事業を進めており、大都市で開かれるイベントに出向いては、ポケットティッシュやチラシなどを配ってPRしている。「シマグラシＳ錠」は、より印象に残る品を作ろうと、地元商工会などで組織する「町定住促進協議会」の知恵を借りて制作。今年度、約5万円をかけて約1000個を作った。

9月に東京で開かれたイベント「ふるさと回帰フェア」で配布、受け取った人からは「面白い」と好評だったという。今後も大阪でのイベントなどで配る。

発案したのは、同協議会で「ふるさとライフプロデューサー」を務める泉谷勝敏さん(40)。自らも07年、大阪での暮らしにストレスを感じた家族の健康状態などを考え、勤めていた証券会社を辞めて、妻の実家がある同町に移り住んだ。

「移住を希望する人の後押しをしたい」と張り切る泉谷さん

泉谷さんは移住当初、「コンビニまで車で行かなければならない」などの不便さを感じていたが、誕生した我が子を自分の孫のようにかわいがってくれる住民らの温かさなどに触れ、今では暮らしを満喫している。

「シマグラシＳ錠」には、そんな泉谷さんの思いも込め、ラムネが入った小箱の裏面に「何もない暮らしに不満を持たなくなります」「真っ暗な夜が平気になります」などと〝効能〟を記している。

泉谷さんは「（記念品が）島に住みたいと希望する都会の人たちにとって、移住を決める際の後押しになれば。今後も様々な企画を考えていきたい」と意気込んでいる。

周防大島町　瀬戸内海に浮かぶ周防大島（屋代島）の4町が2004年10月に合併して誕生。合併時に2万2406人だった人口は今月1日現在、1万8168人にまで減り、過疎化が急速に進んでいる。町は定住の取り組みとは別に、島を訪れる「交流人口」を100万人にすることを目指し、県外の中学や高校の修学旅行を誘致する事業にも取り組んでいる。

喜びと涙の再会

小禄不発弾爆発　40年ぶり

一時重体の女児「助けていただき感謝」

40年ぶりの再会を抱き合って喜ぶ、一時意識不明になった女性と主治医だった大仲良一さん＝3日午後、那覇市与儀の沖縄セントラル病院

「こんなに大きくなって。40年間、ずっと心配していましたよ」。頬を紅潮させ声を詰まらせながら再会を喜ぶ医師と、何度も涙を拭う女性。2人は顔を合わせた直後に、固く抱き合った。1974年3月2日、那覇市小禄の聖マタイ幼稚園近くで発生した不発弾の爆発事故。事故に巻き込まれ、意識不明の重体に陥った当時3歳の那覇市の女性（43）が、主治医だった沖縄セントラル病院理事長の大仲良一さん（79）に40年ぶりに再会した。大仲さんは「あの子は今、どうしているのかなといつも思っていた」と話し、女性は「本当に、本当にありがとうございました」と繰り返した。

主治医・大仲さん「ずっと心配していた」

爆発事故時、聖マタイ幼稚園ではひな祭りのお遊戯会が開かれていた。女性は入園前だったが、兄が園児だったため母親に連れて来られていた。園庭のブランコで遊んでいた時にすぐ近くで爆発が起き、吹き飛ばされた土砂で一時生き埋めになり意識を失った。

近くの外科に搬送されたが、大仲さんが半年前に開業したばかりの沖縄中央脳神経外科（当時）にすぐに転院することになった。大仲さんは「意識不明で、『近くの病院ではどうしようもない』と連れて来られた」と振り返った。爆風で頭を強く打ったとみられ、激しいけいれんがあり、予断を許さない状況だった。

脳圧が上がり、絶対安静。大仲さんは治療を尽くし、両親、看護師が必死に看病した。開業する前まで大仲さんは聖マタイ幼稚園の近くに住んでおり、同園に通っていた次女が転園したばかりだった。「治療しながら、自分の娘のように思っていた」と話す。

2日ほどたって意識を取り戻し、約1週間後に退院した。女性は今、本島内の病院で看護師として働き、高齢者の療養病棟を担当している。大仲さんは「立派に成長したことがうれしく、医者冥利に尽きる。同じ医療業界で働いていることにも不思議な縁を感じる」と喜んだ。

女性は大仲さんから当時の状況を聞きながら、涙を拭い「お会いできて感無量です。助けていただき、本当に感謝しています」と何度も頭を下げた。別れ際に握手をすると、両手でずっと大仲さんの手を握り続けていた。（安田徹）

医師と元患者が４０年ぶりの再会を果たしたこのニュースは、私の心を幸せにしてくれました。感動的な再会の記事は数多く見てきたが、不発弾という沖縄特有の事情があったからこそ、私の記憶に強く残ったのだろうと感じます。今も根強く残る戦時の爪痕。報道が導いてくれた感動の瞬間に、一緒に立ち会えたような気がしました。

「もう一度会ってみたい」「感謝の気持ちを伝えたい」「どこで何をやっているのだろう」。誰しも、一度はそういう思いに駆り立てられたことがあるだろう。40年という時を超えて実現した二人の再会。私の心に深く刻まれることだと思います。

大城 喜行 さん　36歳　沖縄県

琉球新報 ２０１４年７月４日付朝刊を読んで

へいわのこころ みんなにとどけ

6歳の詩 絵本に

昨年追悼式で朗読

へいわってすてきだね

へいわってなにかな。
ぼくは、かんがえたよ。
おともだちとなかよし。
かぞくが、げんき。
えがおであそぶ。
ねこがわらう。
おなかがいっぱい。
やきがのんびりあるいてる。
けんかしてもすぐなかなおり。
ちょうめいそうがたくさんはえ、
よなぐにうまが、ヒヒーンとなく。
みなとには、フェリーがとまっていて、
うみには、かめやかじきがおよいでる。
やさしいこころがにじになる。
へいわっていいね。へいわってうれしいね。
みんなのこころから、
へいわがうまれるんだね。

せんそうは、おそろしい。
「ドドーン、ドカーン。」
ぼくたんがおちてくる。こわいおと。
おなかがすいて、くるしむ。ども。
かぞくがしんでしまってなくひとたち。

ああ、ぼくは、へいわなきこうまれてよかったよ。
このへいわが、ずっとつづいてほしい。
みんなのえがおが、ずっとつづいてほしい。

へいわなかぞく、
へいわながっこう、
へいわなよなぐにじま、
へいわなおきなわ、
へいわなせかい、
へいわってすてきだね。

これからも、ずっとへいわがつづくように
ぼくも、ぼくのできることからがんばるよ。

安里有生君と長谷川義史さん＝沖縄県与那国町で ©Takafumi Okuda

きょう沖縄慰霊の日 37面

太平洋戦争末期の沖縄戦が終結したとされる二十三日の「沖縄慰霊の日」に合わせ、六歳の少年がつづった詩「へいわってすてきだね」が今月、絵本になった。「みんなのこころから、へいわがうまれるんだね」。昨年の慰霊の日に朗読された詩に、編集者や絵本作家らが心を動かされ、「大人も何かしなくちゃ」と真っ正面から向き合った。（東京社会部・鈴木久美子）

詩は、沖縄県沖縄市の小学二年生安里有生君（8）が昨年、与那国町に住んでいた一年生のときに、道徳の授業で沖縄戦や平和の話を聞いて、書いた。沖縄県平和祈念資料館が、毎年小中高校生を対象に詩や作文などを募る「平和のメッセージ」で小学校低学年の部の最優秀賞に選ばれ、昨年の全戦没者追悼式で本人が朗読した。

安里君は、与那国の自然や、家族や友達と過ごす日常をつづり、「ずっとへいわがつづくように　ぼくも、ぼくのできることからがんばるよ。」と結んだ。出版社ブロンズ新社（東京）の編集長若月真知子さんは、本紙に掲載された全文を読んだ友人を通じて詩を知り、絵本化を企画した。

「普通に暮らしていることこそが平和なのだと、子どもの目から書かれていてすごいと思った」と語る。

絵本作家の長谷川義史さん（58）＝大阪市＝は若月さんから絵を依頼され、「今伝えなければならないテーマだ」と、引き受けた。昨年九月には与那国町へ行き安里君にも会った。

多くの絵本を手掛けたベテランだが、「詩にある心象と具体的な物事を、同じテイストで描き一冊にまとめるのはとても難しくて、何度も逃げ出したくなった。でも、『ごまかさずに取り組んだ』と特別な作品になったとする。苦しみつつ、今年の慰霊の日に完成を間に合わせた。水彩の絵は、与那国ののんびりした空気も戦争の緊張感も、安里君の目線を誠実に再現している。

「平和って何だろうなと思いながら詩を書いた」と安里君は言う。完成した絵本に「絵がうまくて、僕の書いたものもちゃんとのっていてうれしい」。

平和のメッセージは、沖縄戦を風化させないように平和祈念資料館が毎年続け、今年で二十四回目になる。過去二万八千点以上の応募があったが、絵本化は初めてだ。学芸員の功刀弘さんは「沖縄発のメッセージを全国に伝えられる」と喜ぶ。絵本は三千二円（税別）。

こういう記事が１面にあることが、素直にうれしい。

事件・事故などのニュースが１面になることが多いこの時代に。これこそインターネットニュースでは得られない、新聞の良さだと思った。

６歳でこの詩を書いた安里くんが素晴らしい。この詩を若月さんに紹介した方が素晴らしい。この詩の絵本化を企画した若月さんが素晴らしい。

絵本の依頼を引き受け逃げなかった長谷川さんが素晴らしい。そして、このニュースを１面に載せた新聞社が素晴らしい。

この記事を読んだ後すぐに絵本を購入させていただきました。６歳で平和というものをここまで表現できる感性がほんとうに素晴らしい。

角谷 隆志 さん　29歳　岐阜県

中日新聞 ２０１４年６月２３日付朝刊を読んで

手を取り合って69年ぶりの再会を喜ぶ斎藤さん（左）と西野さん

戦災震災くぐり抜け

69年ぶり再会

石巻の女性２人

先月10日の本紙記事きっかけ

仙台空襲の戦火を生き抜いた石巻市の女性2人が、69年ぶりに再会を果たした。当時、仙台市立病院看護師の斎藤信子さん（88）と看護学生だった西野真津江さん（83）。終戦後、互いの消息が分からないまま、東日本大震災で共に被災した。二つの災禍を経験した2人は「何より尊いのは平穏な暮らしと人の命」と口をそろえた。

西野さんが7月末、斎藤さんが1人で生活する石巻市の仮設住宅を訪ねた。「長い間、お礼を言いたかった。西野さんは斎藤さんの手を握り、目を潤ませた。

石巻市の国民学校で斎藤さんの妹と同級生だった。

斎藤さんは卒業後、仙台市立病院の看護学校に入学。慣れない土地は心細く「同郷のお姉さん」と斎藤さんを慕っていた。

1945年7月10日未明。米軍機B29が仙台市中心部を爆撃し、現在の青葉区一番町にあった市立病院も炎に包まれた。2人が逃げ込んだ地下室にも火の手が迫る。階段をはい上がり、1階の扉から脱出を図った。

「扉の鉄板が熱くて、熱くて。斎藤さんと力を合わせて押した。必死だった」と西野さん。ようやく出た病院の外には、幾人もの遺体があった。

焦土と化した中心部から、2人は市北部の老人施設に避難。斎藤さんは翌日から病院で負傷者を手当てし、父親が迎えに来た西野さんは看護師を断念、実家に帰った。

戦後、斎藤さんも石巻市に戻った。それぞれ結婚して住まいや姓が変わり、同じ石巻に居ながら顔を合わせることはなかった。

再会のきっかけは、斎藤さんが空襲体験を語った7月10日の河北新報の記事。「あの時、一緒に難を逃れたお姉さんに違いない」。西野さんが人づてに連絡を取り、訪問を約束した。

震災で斎藤さんは同市渡波の自宅が、西野さんは同市小竹浜の自宅がそれぞれ津波に襲われた。「私たちは何度、丸裸にならないといけないんでしょうね」。再会を喜びながら、西野さんは過酷な運命を振り返った。

斎藤さんは「津波は天災だからしょうがない。でも、戦争は人災。人生を狂わせられるのは、いつも庶民」と平和への願いを新たにした。

仙台空襲 共に脱出、津波で自宅被災

平和への思い新た

「二人の女性が手を取り合って笑っている」

私は夏休みのある日、何気なく新聞をめくっていると、１枚の写真が目に留まった。それは、69年ぶりに奇跡の再会を果たしたという記事だった。その再会のきっかけになったものも、1か月前の河北新報朝刊（２０１４年7月10日付）であるというから驚いた。

私自身は、今年成人式を迎えたばかりである。成人式で５～１０年ぶりに再会した友人でさえ懐かしさを感じたが、その３倍以上でもあり、幾多の災害、困難の年月を経て再会できた喜びというものは言葉に言い表せない気持ちではなかったのではないかと思う。

大変な時代をともに生き抜いてこられた、二人の女性に神様がもたらした奇跡。たった１枚の新聞記事で笑顔になれたり、何十年分もの思いが報われることもあるのだと知った。今までご苦労が多かった分、お二人にはこれから先、穏やかな生活をおくっていただきたい。

高橋 李奈 さん　21歳　宮城県

河北新報 ２０１４年８月９日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS 賞 2014

野球の試合をテレビで見る。つねに画面には、ボールが映っている。160kmを超える豪速球を投げるピッチャー、それを打ち返すバッター、見事な守備でそれをキャッチする野手。

でも、ボールから離れたところで選手たちが何をしているか、テレビはそれを伝えない。「5年に一度、いや、僕がユニホームを着ている間、一度も起きないかも」。そう言いながら、必ずピッチャーのバックアップのため、全力で走る中日・荒木選手の姿は、自分たちが働く上で、生きていく上で学ばなければいけないことだ。

新聞の、こんな小さな記事が、教えてくれた。

東 万寿夫 さん　53歳　東京都

日本経済新聞 2014年7月31日付朝刊を読んで

逆風順風

まさかの備え 荒木の献身

中日のアンダーソン・エルナンデスが遊ゴロを処理しては一塁に低投、高投し、森野将彦も捕れない。でも安心。ファウルグラウンドにバックアップに走った二塁手、荒木雅博がいて、余計な進塁を許さない。

荒木のまめまめしい働きは、やんちゃ盛りの子供が取り散らかしたおもちゃをせっせと片付ける親のようでもあり、なかなかほほ笑ましい。

エルナンデスも下手ではない。27日の巨人戦ではレスリー・アンダーソンの三遊間寄りの打球に追いつくと、逆モーションながら、ジャンピングスロー。ノーバウンドで一塁に届き、余裕を持ってのアウトとなった。日本選手にはまず無理なプレーだった。

ただこの肩の精度が悪いので荒木の出番となる。遊ゴロ、三塁ゴロの送球ミスに備えてのバックアップだけではない。走者三塁のときの捕手から投手への返球のカバーも完璧だ。

定位置から駆け寄って、投手の後ろに入る。万が一、捕手からの送球がそれても三塁走者を生還させないよう谷繁元信の投手への返球がそれるか？　考えられない。プロ野球でそんな場面をみたことがある人は多くないだろう。高校野球でもめったにない。

荒木は言う。「うーん、5年に一度あるかどうか。いや、僕がユニホームを着ている間、一度も起きないかもしれない。でも現役でいる限り続ける」

仮に5年に一度であっても、起きない保証はないというのが一つ。そしてもう一つ挙げた理由がふるっていた。「ゲーム中にランニングができるでしょう。何でもないときにダッシュしていたら、バカみたいだけれど、ベースカバーやバックアップなら走る理由ができる」

照れ隠しも含まれていようが「一日でも長く現役でいたいから走る回数を多くする」と言う顔は真顔だ。

巨人に移籍した井端弘和と荒木は先を争うようにバックアップに走っていた。一生に一度あるかどうかの〝有事〟に備えて。中日の黄金時代は記録には残らない彼らの献身に支えられていたのだと思う。

（篠山正幸）

読み始めに婆様と筆者の身長の違いを想像すると、滑稽（こっけい）に思えて少しにやけていました。そして最後にジーパンと背比べする写真を見て、厳格そうな凛とした婆様なのだろうなと想像しました。物と孫への愛情の共存を書いている文章。「ほつれ点検 宙を舞う」の言葉もいい。使い捨ての多い時代に、物の大切さを改めて考えさせられました。

写真を何気なく見ていたとき、最近亡くなった祖母のことを思い出しました。祖母は、手先が器用で折り紙手芸で鶴を作ったり、籠を作ったりして、いくらでもくれました。「やったかの～」と祖母が、僕が「もうもらっとるよ」と会話したことを思い出します。写真から連想される厳格でしゃきしゃき働く姿が亡くなった祖母と重なり、自分自身、祖母の愛情を受けていたことを改めて感じ、この記事を読んで幸せな気持ちになりました。

福田 幸三 さん　43歳　広島県

中国新聞 2014年12月5日付朝刊を読んで

うちの婆様 孫の発見

篠原良一郎 ④

背の丈ジーパン

ほつれ点検 宙を舞う

ジーパンと背比べする婆様

僕の身長は186㌢ある。婆様は141㌢。

婆様が僕のジーパンを持って歩くと、ほぼ背丈と同じ長さになってしまう。つまり婆様が持つと、その体がほぼ隠れてジーパンが宙に浮いているように見えることさえある。

宙を浮くジーパンはひっそりと現れる。普段仕事をしている時、寝ている時。僕に気付かれないようにそっと、僕のジーパンは宙を舞うのだ。

カメラマンの仕事をするとき、作業着としてよくはくジーパンはボロボロで、裾などはほつれ、破れてしまっている所もある。

婆様からすると、それがものすごく気になる。目の付くところにジーパンを置いておくとすぐさまチェックする。ほつれを縫って直せないか、洗濯したほうがいいんじゃないか…。小ぎれに手に取っている。

なのに僕から、「またすぐ汚れるんだからそのままで」と言われる。それならばと最近では、僕が寝ている時に部屋に来てジーパンをこっそりチェックするようになったのだ。

「ズボンの後ろから当て布して、ほつれも破れもきれいに直しといたよ」と誇らしげに笑う婆様。縫い物はお手の物。ジーパンの直しはお金もかかるので、ちょっと助かったりもしている。感謝だ。

なぜ婆様は、ジーパンを顔の高さまで上げてぶらーんとつるした状態で持ち歩くのか。聞くと「ズボンを床にひこずったら余計に破ける。それにあんたのズボンの裾につまずくけえよ」。ああ、そういうことかと納得。でもそれなら畳めばいいのにと言うと「くまなくチェックしながら歩いとるけえ、仕方がない」という熱の入れようだった。

「ことしの冬は冷えそうなけ、私のマフラーあげようか」と婆様。でも、僕にはちょっと短いんですそのマフラー。ジーパンの逆で。

（映像クリエーター＝大竹市）

同居する91歳の祖母・松枝さんとの日々を、孫の目線で切り取ります

ラジオで呼び掛け

献血施設に県民が列

大量出血患者のため

「患者が大量出血し、緊急の輸血が必要」。14日午前9時ごろ、県北地方の病院から県赤十字血液センターに一報が入った。病院によると、200ミリリットルで100本分以上と大量の血液が必要だが、他の患者や緊急時のための同センターの在庫が尽きてしまう可能性があった。異例の事態に、同センターは地元ラジオ局を通じて県民に献血を呼び掛けた。

放送の直後から、ラジオを聞いた県民が各地の献血施設に詰め掛けた。福島市役所前に設けた献血バス2台の前には大勢の市民が集まり、最高気温30度を超える暑さの中、献血待ちの列が絶えなかった。

多くの善意で、通常の平日の約2倍となる516本分の血液が集まり、必要量を確保することができた。同センターの職員は「一報を受けた時はどうなることかと思ったが、驚くほど多くの人の協力のおかげで本当に助けられた」と感謝。今後も継続的な協力を求めている。

献血呼び掛け

県民の善意、女性の命救う

多くの県民の善意が一人の女性の命を救った。出産時の大量出血で生死の境に立たされ、その命を救うために多くの県民が緊急の献血に協力した女性が15日、一命を取り留めた。女性の父親は同日、福島民友新聞社の取材に「多くの人の善意が娘の命を救ってくれた。娘の命が助かったことを伝えたい」と話した。

女性の父親は15日午前、同日付の福島民友新聞に掲載された献血協力の記事を読み、大勢の県民が献血に協力し、その善意で娘の命が救われたことを知った。父親は居ても立ってもいられず、妻と共に地元ラジオ局を通じて献血への協力を呼び掛けた福島市の県赤十字血液センターを訪れ、感謝を伝えた。輸血用血液の確保に奔走した同センターの職員も安堵し、互いに涙を流しながら無事を喜んだという。

父親によると、女性は14日午前、伊達市の病院で帝王切開で男児を出産した際に大量出血し、意識を失った。福島市の病院に搬送され、緊急手術を受けた。ラジオを通じた献血協力への訴えで最終的には、通常の平日の約2倍に相当する200ミリリットル換算で516本分の血液が集まり、女性は命の糸をつなぎ留めた。「赤ちゃんも元気で娘も意識を取り戻した。多くの人たちの思いに本当に感謝したい」。父親は何度も何度も多くの善意への感謝の言葉を続けた。

「ラジオで呼び掛け。大量出血患者のため、献血施設に県民が列」。5月の福島県の地方紙に、2日間にかけて紹介されたこの記事は、何度読み返しても、感動で涙があふれそうになります。

「多くの県民の善意が一人の命を救った」。出産時の大量出血で生死の境に立たされた女性を救うために、30度を超える猛暑の中、各地の献血場所に、協力する大勢の人が集まりました。県赤十字血液センターが、大量の血液が必要だが、在庫が尽きてしまう可能性があるため、地元のラジオ局を通じて献血を呼び掛けました。それを聞いた県民が行列を作ったのです。その善意で、娘の命が救われたことを知った両親が、同センターを訪れ、互いに涙を流しながら無事を喜んだという記事でした。

別の日の新聞に、福島県民は、もともと、他人に優しく、あったかい県民性を持っていると書いてありました。誰かを思いやる優しい心は、人としてのあるべき姿を教えてくれます。善意の心は、女性だけでなく、記事を目にした私にも、温かい思いが伝わってきました。私事ですが、息子は「これまでは親に守ってもらったけれど、これからは僕が福島県民を守ります」と言って、警察官になりました。復興を願って、応援してくださる多くの方々に、「福島県はこういうところです」ということを知っていただきたくて、この記事を選ばせていただきました。

献血に協力した皆様！「ハッピー大賞」は、あなたたち、一人一人に贈られるものです。私は福島県民を誇りに思います。

酒井 律子 さん　56歳　福島県

福島民友新聞 2014年5月15、16日付朝刊を読んで

HAPPY NEWS 家族賞

栃木県　酒井さん親子と祖母
〈母・酒井由起さん、姉・珠寿さん、妹・琉寿さん、祖母・手塚光子さん〉

静岡県　植松千恵子さんのお孫さん３人
〈昂大さん、桃菜さん、菅沼凛太郎さん〉

静岡県　戸塚さん親子
〈父・孝二さん、娘・聖奈さん〉

大阪府　讃岐さん親子
〈母・美千子さん、息子・勇さん〉

HAPPY NEWS 学校賞

家族での取り組みを学校単位でとりまとめた4校

山梨県　山梨県立北杜高等学校
愛知県　碧南市立西端小学校
大阪府　関西創価高等学校
岡山県　朝日塾中等教育学校

学校単位でとりまとめた1校

熊本県　熊本電子ビジネス専門学校

※ 企画アイデア賞は該当作なし

HAPPY NEWS 家族賞

北海道　内藤葵乃さん、大さんきょうだい

青森県　中坂さん親子
〈母・るり子さん、息子・和希さん〉

宮城県　井崎さん親子
〈父・英滋さん、母・美奈子さん、娘・英乃さん、娘・英里さん〉

宮城県　佐々木さん親子
〈母・幸恵さん、娘・風美さん〉

山梨県　井上さん親子
〈母・智末さん、娘・彰子さん〉

長野県　花輪さん親子
〈母・弥生さん、息子・洋弥さん、息子・和弥さん〉

長野県　湯本さん親子
〈母・一江さん、娘・鈴花さん、娘・楓花さん〉

静岡県　柴田さん親子
〈母・朋子さん、娘・愛未さん〉

兵庫県　三軒家さん親子
〈母・尚美さん、娘・美月さん〉

広島県　澤田さん親子
〈母・明江さん、息子・明伸さん〉

広島県　山口さん親子
〈母・ジンヤさん、娘・未来さん〉

徳島県　露口瑠奈さん、璃奈さんきょうだい

高知県　久保田さん親子
〈母・美紀さん、娘・美優さん、息子・聖那さん〉

福岡県　永露さん親子
〈母・江未子さん、娘・瑶季さん〉

家族奨励賞

HAPPY NEWS 2015 募集要項

想像もしていなかった出合いやきっかけを与えてくれた記事、あなたをHAPPYな気持ちにした記事にコメントを添えてご応募ください。キラリと光るコメントをお寄せいただいた方には、賞をお贈りします。大学生や家族などグループの取り組みも大歓迎！

【応募要領】
▽読んだ紙面の掲載日、掲載紙名、朝・夕刊の別▽コメント（200字から400字程度）▽郵便番号▽住所▽氏名▽年齢▽性別▽職業▽電話番号を書いてご応募ください。新聞紙面は、「紙面の切り抜きを同封して郵送」「紙面を撮影した写真をコメントに添付して送る」のいずれかの方法でお知らせください。

【応募対象と締め切り】
2015年3月1日～2016年2月5日の新聞に掲載された記事や写真、広告。応募締め切りは2016年2月5日（金）。
※ 必着（2月5日付紙面をもとにした作品は同日消印有効）
※ ただし2016年2月6日～29日の紙面をもとにした作品に関してのみ、2月中も応募を受け付けます。

【応募方法】
郵送、メール、インターネット

◆ 大学生のみなさん
〇大学生の作品は、一般部門と大学生大賞（個人）の対象として審査します。〇ゼミやサークルなどグループ（2人以上）で応募した場合、作品は一般部門、大学生大賞（個人）の両方で審査され、応募したグループは、大学生大賞（グループ）の審査対象となります。〇大学名・学年、グループ名（グループ応募の場合）をお知らせください。

◆ 小中高校生のみなさん
〇親子やきょうだいなど、家族で取り組んでください。〇記事は同じものでも、家族それぞれ別のものでも、どちらでも結構です。〇家族応募の場合は必ず、作品を同じ封筒にまとめてお送りください。〇小中高校生個人での応募は受け付けていません。「いっしょに読もう！新聞コンクール」にご応募ください。
締め切りは9月11日（金）必着。詳細は（http://nie.jp）参照

【賞および賞品】
日本新聞協会ならびにゲスト審査員が応募された紙面とコメントを審査し、HAPPY NEWS大賞、HAPPY NEWS賞2015、大学生大賞、ゲスト審査員賞、家族賞などを贈賞します。

「HAPPY NEWS大賞」現金30万円	1件
「HAPPY NEWS 賞2015」現金2万円	10件程度
「大学生大賞」（個人）現金10万円	3件
「大学生大賞」（グループ）現金30万円	1件
「ゲスト審査員賞」現金5万円	数件
「家族賞」現金2万円	数件

あわせて、2015年度のHAPPY NEWSを象徴する「HAPPY NEWS PERSON」を選びます。
結果発表は、2016年4月上旬の新聞紙面、日本新聞協会ウェブサイト、「新聞をヨム日」関連の配布物にて行います。
※ 選ばれたコメントは、新聞をPRする各種制作物、ウェブサイトおよびイベントなどに使用します。発表に際し、趣旨を損なわない程度にコメントの一部を修正することがあります。
また、募集期間中にウェブサイトにて一部のコメントを紹介することがあります。
※ 応募作品は返却しません。
※ いただいた個人情報は、当キャンペーン以外の用途には使用しません。

【応募・問い合わせ先】
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1
日本新聞協会「HAPPY NEWS」係
電話 03（3591）4637
メール happynews2015@pressnet.or.jp
インターネットでのご応募は、日本新聞協会の新聞PRウェブサイト「よんどく！」から。
http://www.yondoku.com
よんどく！ 検索

スクラップブッキングを贈ってみませんか！

新聞協会は４月６日の「新聞をヨム日」に合わせて、「HAPPY NEWS スクラップブッキング」を発表します。スクラップブッキングとは、写真やシールなどをきれいに飾りつけて貼る手作りのクラフトです。

あなたが見つけた新聞記事を貼り、写真やメッセージ、思いの詰まったものを添えて、大切な人に贈ってみませんか。

ゲスト審査員の森本千絵さんがデザインした「HAPPYNEWSスクラップブッキング」キットを先着1000名様にプレゼントします。郵便番号、住所、氏名、年齢、性別――を明記のうえ、日本新聞協会スクラップブッキング係あて郵便またはメール（kikaku@pressnet.or.jp）でお申し込みください。

「よんどく！」サイトでも活用例を紹介していきます。

大学生大賞（個人）

心ほぐす里親レシピ

生みの親に代わって子どもを育てる里親＝■＝が、その子らのために作った料理を紹介するレシピ集が好評です。一皿にまつわる物語も添えられ感動を呼んでいます。

支援NPOが紹介冊子

冊子は、里親を支援するNPO法人「キーアセット」（大阪府東大阪市）が作成した「まいにちの家庭レシピ」。里親家庭の日常を知ってほしいと昨年9月に千部を発行。今年9月には500部を増刷した。

里親の女性6人が1人2品を紹介する。食べることを拒否していたり、ストレスなどから過食だったりする子たちの心に触れようとする中で生まれたレシピばかりだ。

冊子は啓発イベントなどで販売、配布してきた。「掲載されていた料理を作ったら子どもが喜んだ」という里親がいた。一般の人からも「心が温まった」といった感想が寄せられた。

キーアセット代表の渡邊守さん(43)は「『あなたは大切な存在なんだよ』と簡単には子どもに伝わらない。だから里親は、毎日のご飯を通して繰り返し伝える」と言う。「里親は子どもの笑顔が大好きな普通のおじちゃんやおばちゃんなんだということが伝わり、応援してくれる人が増えるとうれしい」

A5判43ページ。300円（税込み）。キーアセットは電話06・6720・6811。

里親制度

児童福祉法に基づき、保護の必要な子どもの養育を生みの親とは別の家庭に委託する制度。親から虐待を受けるなど特別な支援が必要な子どもを養育する専門里親や、養子縁組を希望する里親など4種類がある。厚生労働省によると、2012年度は3487世帯に4578人が委託されている。

ひと口おにぎりとヒレカツ。「思い出が詰まってます」と話す平山幸子さん（左）と眞さん＝大阪府寝屋川市

朝食抜く子にそっと

●ひと口おにぎり

料理を載せた一人、大阪府寝屋川市の主婦平山幸子さん(68)は32年間、里親を務めてきた。元会社員の夫眞さん(69)、実の娘2人とともに15人の子たちと過ごした。

家に迎えた時に高校生だった子は、児童養護施設での生活が長く、朝食を食べなかった。そこで、「いってらっしゃい！」と送り出す時に持たせたのが、掲載した「ひと口おにぎり」だ。通学途中でも食べられるよう、ピンポン球サイズをラップに包んだ。

「くさいけどおいしい」

●おしんこふりかけ

川崎市の主婦(61)の一品は、刻んだぬか漬けを塩抜きした後、甘酢に漬けたふりかけだ。いま養育している10歳と6歳の男の子は、便秘症や野菜嫌いだった。その2人のため作った。10歳の子は栄養が偏っていたのか、ぼっちゃりしていた。ぬか漬けを出すと、「くさいけどおいしい」と笑った。

かわいい皿にハンバーグやマカロニサラダ、ふりかけごぼう飯を並べ、楽しんでゆっくり食べてもらえるよう心を砕いた。「まな板のトントンという音、首を長くして待つ楽しさ。そんなことも伝えたかった」

6歳の子が保育園のころ。遠足の日に迎えにいくと、会話が耳に入った。「おばちゃんのお弁当は世界一」と6歳の子。「お前は世界一か。オレはな、宇宙一だぞっ」と10歳の子。子どもの心をそっとなぐるような日常を知ってもらえれば」と言う。（山内深紗子）

「うるさいなあ」と言われ続けた。だが1カ月後、制服を洗濯すると、ポケットからラップがいくつも出てきた。次第に笑顔を見せてくれるようにもなった。「食べ物が、さりげない距離感で絆をつむいでくれたのかな」

どの子も、なじめば食欲は旺盛だ。そこで作ったのがヒレカツだった。家計をきりつめて毎日のように揚げ、台所に置いた。みんな、カツをつまみながらテレビを見た。

長所をほめ、直してほしいところは少しずつ伝えた。人を傷つけたら叱り、みんなで食事する。毎日それだけを続けた。

家に迎えた時に乳児だった最初の子はパパになった。夫婦は「子育てはいつだって真剣勝負でしんどい。でも、ともに成長できる喜びは何にも勝る」と話す。

時を経ることで思い出の味はより深みを増す。自分は高校卒業までの4年間を児童養護施設で過ごした。なぜ自分がこのような生活をしなければならないのか。現状に嘆く日々が続いた。

その中で楽しんでいた場所は食堂だった。ホワイトボードに書かれる献立は毎日違い「今日は何かな」と心を躍らせながら食堂へ入った。大好物のカレーが献立に並んだ時には、お腹をすかせて器いっぱいに盛った。

もちろん嫌いな献立もあった。筑前煮だ。「今日は筑前煮か」。そのときだけは心が沈んだ。それでも食堂にいるおばちゃんは「絶対ここを出てから筑前煮たべたくなるから」と口癖のように話していた。

東京の大学に単身で上京した。晩御飯はアルバイト先の賄いが多い。ある日の賄いで筑前煮が出た。一口食べるとあのころの味を思い出した。「おいしい」。食堂のおばちゃんが話していたことは本当だった。今では筑前煮が大好物。噛み締めながら、思い出にふけっていた。

沼田 亮 さん　22歳　東京都

朝日新聞 2014年11月8付朝刊を読んで

旅する私のぬいぐるみ

ぬいぐるみが名所をめぐったり、図書館で本を読んだり―。そんなファンタジーのようなツアーやイベントが盛況だ。その様子を収めた愛らしい写真は、大人に癒やしを、子供にはわくわくする体験を提供するサービスとして、人気を集めている。（戸谷真美）

ツアーネット配信

ぬいぐるみ専門の旅行代理店「ウナギトラベル」（東京都港区、unagi-travel.com）には、宅配便で毎日「ツアー客」が到着する。東京ツアー（3700円）の場合、浅草や東京タワー、明治神宮などの名所をめぐり、参拝をしたり展望台から景色を眺めたり。途中、もんじゃ焼きやすしなど「客」の好みに合わせた「昼食」もとる。

ぬいぐるみは、同社代表の東園絵さん(39)が公共交通機関を使って運び、ツアーの様子を写真に収め、フェイスブックやツイッターでリアルタイムに持ち主に配信。1回のツアー定員は6～7体程度だが、毎回ほぼ満員。昨秋、海外メディアが紹介したことで、欧米からの参加が2割に上るという。

鹿児島市に住む竹之内愛さん(33)は6月、雷のぬいぐるみ「ゴロ」を横浜ツアーに出した。ぬいぐるみが大好きで「感情をもって動いたらいいのに」と思っていたが、大人になるとそんな気持ちは理解されにくい。だが、フェイスブックには同じような持ち主の声があふれ、新しいつながりができた。竹之内さんは車椅子のため遠方の旅行が難しいこともあり、「世界観を共有できるのがうれしいし、自分自身が励まされる」と話す。

4年前からツアーを実施する東さんは「すべての方にアドベンチャー（冒険）を提供したいと思って始めた。旅の理由はそれぞれなので、お客さまの気持ちに寄り添うことを心がけています」。預かる際のアンケートでは名前や性別はもちろん、エピソードや乗り物酔いの有無まで尋ねる。利用者には、高齢や病気で旅行が難しい人や、「妻の育児の息抜きに」と申し込んだ男性も。父の仕事の関係で終戦直後の日本で少年時代を過ごした米国の70代男性が、「美しかった日本に自分の代わりに行かせたい」と当時から大事にしていたテディベアを送ってきたこともあった。昨年は東日本大震災の被災地、宮城県気仙沼市でカキ漁を「体験」するツアーも行った。今後はツアー先を増やしたり、企業訪問なども手がけたいという。

れんが造りの東京駅をバックに記念撮影も（ウナギトラベル提供）

子供にはわくわく体験

図書館にお泊まり

図書館にもぬいぐるみを使ったイベントが広がっている。米国の図書館で始まったとされる「ぬいぐるみのお泊まり会」。平成22年に国立国会図書館がサイトで紹介して以降、国内でも開かれるようになった。公共図書館など約400館の運営に携わる図書館流通センター（文京区）によると、昨年度は全国で22館が実施した。

東京都杉並区立中央図書館が6月に開いたお泊まり会は、抽選になるほどの人気だった。当選した0～12歳の15人が預けたぬいぐるみが、お話し会や書庫の探検、本の補修などをする様子を5人のスタッフが写真に収め、手作りアルバムと一緒に返却。子供たちは「かわいい」「こんなことしてたんだ」と喜び、「ぬいぐるみが読んだ本を借りたい」と、後日訪れる母子もいた。

イベントを担当した同館スタッフの山崎郁乃さん(35)は「自分では選ばない本を知ってもらったり、図書館は『静かに勉強しないといけない場所』ではなく、明るくて楽しい場所だと思ってもらえれば」と企画の意図を説明する。同館では今後、参加人数を増やせるよう検討していくという。

ぬいぐるみの「お話し会」。読み聞かせ役のぬいぐるみもいる（杉並区立中央図書館提供）

ぬいぐるみ専門の旅行代理店――。ぬいぐるみが大好きな私にとって、この記事にはたくさんの夢が詰まっており、新しい世界が広がっている気さえした。

ぬいぐるみの世界は、子供たちだけのものではない。ぬいぐるみはただのモノでもない。いつも温かく見守ってくれる家族のような、なんでも話せる親友のような存在である。また、自分の分身のような気もする。

ツアーに参加するぬいぐるみが、持ち主にとってそのような大切な存在であるということを理解し、「お客様」として接しているというエピソードを読んでほっとして、とても温かい気持ちになった。持ち主の思いもぬいぐるみと共に運んでいると感じた。

普段はいつも同じ場所でそっと私たちの帰りを待っていてくれるぬいぐるみたちが、今度は旅に出て、体験を語ってくれる。記念写真のぬいぐるみは、生き生きしてうれしそうだ。きっと喜んでいるにちがいない。ぬいぐるみの体験を通して、私たちの心を豊かにしてくれる幸せな記事であった。

村山 友里枝 さん　26歳　北海道

産経新聞 2014年7月2日付朝刊を読んで

大学生大賞（グループ）に川崎医療短期大学

HAPPY NEWS 2014の大学生大賞（グループ）には、多数の応募があり、審査の結果、川崎医療短期大学（岡山県倉敷市）が大学生大賞（グループ）に選ばれました。

受賞した川崎医療短期大学への贈賞式は3月3日、同短期大の大会議室で行われました。

山口恒夫学長をはじめ、指導にあたった橋本美香准教授（現在は川崎医科大准教授）、見尾久美恵講師ら教職員、学生ら約６０人が出席。山陽新聞社の佐々木善久・執行役員読者局長から、山口学長に表彰状と賞金３０万円が贈られました。

【山口学長のコメント】

HAPPY NEWS大学生大賞をいただき、ありがとうございます。新聞は、さまざまなことを学べるので、若い人たちにも毎日、読んでもらいたいと思っています。これからも新聞に親しんでいけるように学生に促していきたいと思います。

【医療保育科2年西岡布美香さん（20）のコメント】

岡山の医療用品メーカーが犬の椎間板ヘルニアの治療に使うコルセットを開発したという記事を選びました。人間だけでなく動物にも目を向ける思いやりに、温かい気持ちになりました。新聞を使った授業がきっかけで、新聞への関心が高まりました。これからも、心温まる記事や楽しい記事などを探したいと思います。

「自分の可能性にふたをしない限り、年齢は関係ない。きっと結果を出してみせます」

今泉さんの力強い言葉に刺激を受ける。ようやく成人した私は、これまでまだ子どもだからと甘えたようなことを言うことが多かった。しかし何をするにも早いことも遅いこともない。そのことを改めて教えられた。そして大事なのは応援してくれる人の存在。人は仲間がひとりでもいることによって強くなれる。夢を成し遂げるのに必要なものは自分自身の強い決意と仲間の存在なのだろう。

吉川 真澄 さん　20歳　神奈川県

朝日新聞 2014年12月9日付朝刊を読んで

今泉健司さんのコメント

このたびは、名称を聞いて、こちらがハッピーになるような賞をいただき、誠にありがとうございます。皆さまの応援のお陰で、２７年の夢をかなえることができました。皆様に感謝の気持ちを忘れることなく、これからも、自分が笑顔でハッピーに過ごすことで、周りの人も笑顔でハッピーに過ごせるような、そんな人間を目指して頑張ります。今後も応援よろしくお願いいたします。

最年長 41歳でプロ棋士へ

朝日アマ名人・今泉さん

戦後の将棋史上、最年長のプロ入りをめざす朝日アマ名人、今泉健司さん(41)＝広島県福山市＝が8日、東京・将棋会館であったプロ編入試験五番勝負第4局で石井健太郎四段(22)に勝ちシリーズ通算3勝1敗でプロ入りを決めた。来年4月1日付でプロ四段となる。

これまでのプロ入り最年長は、プロ棋士養成機関「奨励会」に在籍の年齢制限がなかった1957年の故・北村文男さんの37歳。

今泉さんは14歳で奨励会に入会したが、26歳までにプロと認められる四段に昇れず、年齢制限で99年退会。2007年、アマ棋戦優勝者に用意された試験を経て再入会したが、2年間の期限内に四段に昇れず、再び退会した。

今回は、アマ棋戦の成績優秀者が出場できるプロ公式戦で10勝以上かつ勝率6割5分以上の条件をクリアしプロ編入試験の受験資格を獲得。3度目の挑戦で27年がかりの夢をかなえた。

この日の対局は午後5時に終局した。対局室になだれこんだ報道陣を前に、今泉さんは何度も「うそみたい」と繰り返した。「良い正月を迎えられますね」との問いには、涙ぐみながら「ありがとうございます」と深々と頭を下げた。

41歳のプロ入りは、回り道で得た経験と仲間の支えが原動力となった。

09年の2度目の奨励会退会後、地元の福山市の介護施設で働いた。資格をとって一度は第二の道を介護に定めた。「介護を通じた人間的な成長が将棋に好影響を与えた」と分析するのは瀬川晶司五段(44)だ。自身も年齢制限で奨励会退会後、サラリーマンになったが、05年に35歳で特例のプロ編入試験に合格した。

2年前に始めたフェイスブックでつながった人たちの応援も後押しとなった。

「一人じゃない、と強くなれた」と今泉さん。元奨励会員の野島崇宏さん(37)ともフェイスブックを通して再会し野島さんが立ち上げた「応援する会」はブログで今泉さんの近況を報告した。

プロになっても試練は続く。主に各棋戦の対局料で生計をたてるプロ生活は、ランク最下位の「フリークラス」から始まる。10年以内に規定の成績を挙げ「C級2組」に昇級しなければ、引退に追い込まれる。

終局後の記者会見で、今泉さんはきっぱり言った。「自分の可能性にふたをしない限り、年齢は関係ない。きっと結果を出してみせます」

（佐藤圭司）

将棋プロ編入試験の第４局で勝ち、プロ入りを決めた朝日アマ名人の今泉健司さん。右は石井健太郎四段＝８日午後、東京・千駄ケ谷の将棋会館、関口聡撮影

小学校低学年

「おるす番の『音』」

千葉・茂原市立豊田小3年　野口 結菜

「今日は一人でおるす番してもらう日だからね。大丈夫？」

朝、学校に行く前にお母さんが、げんかんでわたしの頭に手をおきながら言いました。とても心配そうだから、わたしはつい、「わかった。まかせて！」と元気に答えてしまいました。

学校が終わると学童クラブには行かずにおうちに帰りました。（ガチャ）「ただいまー」。もちろん返事はありません。うがい手あらいをすませて、次はしゅく題。今日は漢字の練習です。（カリカリ、シュシュ）しばらくすると外から（タタン）と音がしました。「お兄ちゃんだ」。自てん車のスタンドを立てる時の音でした。わたしはげんかんのドアの前まで行って、お兄ちゃんが「ただいま」と言う前に「おかえりー」と言いました。

お兄ちゃんはわたしが入れた麦茶をのむと「さて、べん強するか」とえん筆をもちました。私もさっきの漢字のつづきをやりました。（カリカリ、カリカリ、シュシュ、シュシュ）一人で勉強していた時とはえん筆の音がちがいます。2人で来きでもならしているみたい。

べん強が終わるとお兄ちゃんは「ゆいな、おれはじゅくに行くから、げんかんのカギをしめておくんだぞ」と言いました。

（バタン、ガチャ）わたしはげんかんのカギをしめてリビングにもどりました。部屋の中はすごくしずかです。（カチカチ）なんの音？　時計のはりの音でした。しばらくすると外で（プーン）と車の音がしました。うちのちゅう車場には車はとまっていません。「何だお母さんじゃなかったのか」。家の中にもどると、とつぜん（ガチャン）と台所の方から音がしました。さっきお兄ちゃんが麦茶をのんだコップがころがった音でした。「びっくりした」（ドクドク、ドキドキ）。心ぞうの音まで聞こえてきました。

少しすると（ガチャ）とげんかんのカギを開ける音がしました。「ただいま、だいじょうぶだった!?」。お母さんでした。「おかえりーー」。わたしはお母さんにだきつきました。そのとたん、（ジュワー）と全しんがあたたかくなったような気がしました。お母さんは「一人でおるす番していたからきんちょうしていたんだよ。ジュワーは、きんちょうがなくなった音だよ。えらかったね」とほめてくれました。それからお母さんとおふろに入りながら今日の「音」の話をしました。

（ガチャ、バタン、ドンドンドン）「お兄ちゃんが帰ってきた音じゃないかな」「ただいまー」。お兄ちゃんでした。「ほーらね」。お母さんがわらって言いました。おふろから出るとお兄ちゃんが「ゆいな、一人でるす番してて、なかなかったな！」と言いました。私は「全きん大じょうぶだったよ」と答えましたが、心の中では（ひとりぼっちじゃないって、やっぱりいいな）と思いました。

昼間の音、夜の音、いろんな音をかんじたおるす番でした。でも、わたしがすきな音は、家族みんなといっしょにいる、にぎやかな音だなぁとあらためてかんじました。

（指導教員・高木宏子）

音を通して感情伝わる

【講評】いい作文ほど、自分が書きたいことを相手に伝えようという工夫をしています。野口さんはそれを「音」で表現しました。実際にはわずかな時間のお留守番。でも、そのときに感じた不安が、さまざまな音を通して、読む人の心に深く、強く迫ってきます。文章を書く人すべてに、参考にしてほしい作品です。

（石崎洋司）

小学校低学年で文部科学大臣賞に選ばれた野口さんの、留守番をした経験を様々な音を交え、自分の感じたことを読者に伝えることに驚きました。私はつい先日２０歳になり、成人になりました。この文章を読むと小学生のころに感じた音、気持ち、家族との日常生活など様々なことが思い出され、とても幸せで、少し切ない気持ちになりました。朝からこんな経験が出来るなんて今日は早起きしたかいがありました。また２０歳の私を感動させた野口さんはすごいなと思います。ありがとうございます。

原 大輔 さん　20歳　東京都

読売新聞 2014年11月29日付朝刊を読んで

私の声

ふるさとの鯉こく

今年も鯉が届いた。ふるさと長野の佐久鯉だ。懐かしい信濃毎日新聞に包まれている。早速ひと煮立ちしておく。今は亡き父母も、私たちきょうだいも幼いころから鯉こくを食べずに年越しをしたことがない。

両親が90歳前後になって遠距離介護も難しくなり、見かねた夫が引き取ったらと私の背を押してくれ、今の住まい、千葉県柏市に引き取ったのは13年ほど前のこと。2人は住み慣れた地を離れ、以来10年近く、わがまま一つ言わずこの町に居てくれた。

どんなにふるさとへ帰りたかったかと思うと、今でも心が震える。父は、生まれた和田村（現小県郡長和町）を一度も離れたことがなく、好きな野良仕事に精を出し、子どもたちに野菜などを送るのを何よりの楽しみとしていた。

こちらに来てからも、大みそかの晋は欠かすことなく佐久より鯉を取り寄せ、作ってあげていた。晩年、母は飲み込む機能が衰え、鯉こくの汁に骨を取り除いた身を入れミキサーにかけて食べたが、父は最後の年まで上手に骨を外し、はらはらして見ている家族の前で完食していた。

今では夫はもとより子どもたちとその連れ合い、孫たちもお正月は鯉こくを楽しみに集まってくれる。三が日が過ぎ、女正月には近所の友人たちを招いてふるさとの鯉こくを振る舞うのが、何よりの楽しみである。

（影山はつ子・72歳・千葉県）

我が家では毎年、大みそかには祖母の家でブリの照り焼きを食べる。婿養子でブリが苦手な父も、この日ばかりは我慢して食べる。父の実家では、毎年サケを食べて年越しをしていたそうだ。ブリもサケもいわゆる、出世魚の部類なのだからどちらでも良いと私は思うのだが、伝統を振りかざす祖母にはかなわない。

毎年大みそかにふるさとの味を再現している、というこのエピソードには心が温まった。御両親との思い出がたっぷりつまった鯉こくを、ご家族やお友達に振る舞い、喜ばれているのはとても素敵なことだと思う。離れた場所にあっても、ふるさとの味が故郷を感じさせることにしみじみとした。

大学に入学して親元を離れ、初めて迎えた去年の大みそか、私は実家に帰った。そこにはブリをはじめとする母の味と、家族のだんらんとがあった。家族と母の味の温かみを胃袋いっぱいに抱え、家族が迎えてくれるふるさとが自分にあることを幸せに感じたことを、改めて思い出させてくれた記事だった。

近藤 由実 さん　19歳　長野県

信濃毎日新聞 2015年1月12日付朝刊を読んで

大学奨励賞

東京都	スポーツ法政新聞会
東京都	成蹊大学新聞会
東京都	東洋大学スポーツ新聞編集部
東京都	明大スポーツ新聞部
埼玉県	十文字学園女子大学
神奈川県	文教大学国際学部本浜ゼミ
長野県	信州大学全学教育機構
愛知県	名古屋工業大学新聞部
大阪府	近畿大学金井啓子研究室
広島県	広島文教女子大学

第5回いっしょに読もう！ 新聞コンクール

新聞協会は、学校などで新聞を教材として活用する「NIE（Newspaper in Education＝「エヌ・アイ・イー」、教育に新聞を）」活動を展開しています。その一環として、小、中、高・高専生を対象に「いっしょに読もう！新聞コンクール」を実施しています。同コンクールは、児童・生徒が①新聞記事を選んだ理由や自分の意見・感想、②家族や友だちに自分が選んだ記事を読んでもらい、その人の意見や記事について話し合った内容、③話し合った後、自分の意見・感想・提言など――の３点を書いて応募するものです。自分一人の感想・意見の表明だけではなく、周囲の人の意見も聞いて、より深く考える機会の提供をねらいとしています。

2014年度の第5回には、全国から35,375編（小学生4,789編、中学生16,484編、高校・高等専門学校生14,102編）の応募がありました。同コンクールに設けたHAPPY NEWS賞の作品と最優秀賞の概要、上位入選者をご紹介します。その他詳細は、NIEウェブサイト（http://nie.jp）を参照ください。

※受賞者の学校名・学年は、受賞当時のものです。

声のドナー もう一声

ボランティアの声を録音して合成し、病気で声を失った人に音声装置を通じて自分に近い声で会話してもらう「ボイスバンクプロジェクト」が名古屋市などで進められている。ボランティアは「声のドナー（提供者）」と呼ばれ、参加者が多いほど作れる声の幅が広がる。名古屋工業大（名古屋市昭和区）が録音に協力し、参加者を求めている。

（社会部・中崎裕）

防音室で声の収録をするドナー＝名古屋市昭和区の名古屋工業大で

音声装置 録音協力者を募集

「キツツキがコツコツと木に穴をあけ…」「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ…」名工大のスタジオで、ボランティアに応じた女性が画面に出てくる短文を読み上げる。短文は約二百種類で、一人あたりの録音は一時間弱。今後、最新の技術で声を加工する。

音声装置は、喉頭がんや筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）などで声を出せなくなった人が、パソコンなどに入力した文字を音に変換する際に使う。声を失う前に録音した自分の声を出す装置も販売されているが、組み合わせ次第で不自然な発音になる場合がある。

最新の技術では、声をコンピューター処理することで音と音の間を補正してなめらかな発音にすることが可能に。名古屋工業大の徳田恵一教授(五三)らが技術を開発し、国立情報学研究所（東京）の山岸順一准教授(三五)が大勢の声を合成することで本人の声の収録は数十分で済むように改良した。

山岸准教授は「進行性の病気で既に発声に影響が出ている場合、自分の声を録音しても障害のある状態を再現してしまうのが課題だった」と説明。ほかの人の発音を基に補正することで、発病前の状態に近づけるようにした。今年末ごろの試作品完成を目標に、二〇一三年冬から収録が始まった。

声は年齢や地域によって特徴が異なるため東京や大阪、名古屋、札幌でボランティアを募集。昨冬から始まった東京と大阪ではそれぞれ百数十人の声が集まったが、四月に始まった名古屋では認知度不足のためか約五十人にとどまる。「特に中年男性や子どもの声が不足気味」と名工大のスタッフ。一人でも多くの「声のドナー」を待っている。

録音は一カ月に数日間程度で、今月は二十九日午後に予定。問い合わせや申し込みは、山岸准教授＝メールvoicebank@nii.ac.jp＝へ。

「自分で会話し生きたい」利用者切実

病気で声を失っても「自分の声を使って生きていきたい」と思う人は多い。

「声は自分の一部。少しでも自分を残したかった」。筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）を患う元外交官、嶋守恵之さん(四七)＝東京都北区＝は、音声合成システムのソフトウエアを販売する会社「ウォンツ」＝名古屋市中区＝が提供する自分の声を利用し、音声装置を使っている。

二〇〇八年に診断を受けた時は「もう人生終わりだと思い、人工呼吸器をつけるつもりもなかった」。妻に励まされて生きようと考えたとき、「声の保存は大切と思うようになった」という。診断から一年後、七時間かけて声を録音。「よく使うフレーズを録音するのは、今後も生きていく自分を想像すること。録音は、生きる決意を固めるプロセスだった」

ろれつが回らなくなった一年に気管切開の手術を受け、完全に声を失ってから音声装置を使い始めた。口のスイッチで文字列の表示されたパソコン画面を動く赤い枠から文字を選び音に変換する。「本人らしさが感じられる」と妻は喜ぶが、「イントネーションが外国人みたいになることがある」という。「感情を込められる発音になればベストです」と話している。

① この記事を選んだ理由と、記事を読んで思ったこと、考えたことを書いてください

ボイスバンクって何だろう？と思い、この記事を選びました。ボイスバンクプロジェクトは、病気で声が出せない人のためにいろんな人の声を集めて、声を失う前に録音した物と、他の人の発音をもとにほ正して、発病前の状態に近づけるお手伝いをしています。エコキャップを集めたり、文ぼう具を集めて送るボランティアは知っていたけど、声のボランティアというのは、初めて知りました。どこでどんな風に声を集めるのかな？と思いました。

② 家族や友だちなどにも記事を読んでもらい、その人の意見を聞きとって書いてください

母は、発病前の自分の声に近づけてくれる取り組みをしているのをこの記事で初めて知りました。けん血などとちがいいたみが無いので、子どもでも参加しやすいボランティアだと思います。声も自分らしさを表現する一つです。たくさんの声が集まり、より自分の声に近づき積極的に会話をしてもらいたいと言っていました。

③ 話し合った後のあなたの意見や提案・提言を書いてください

記事では中年男せいや子どもの声が不足気味とありました。自分でもこのボランティアならできると思い、問い合わせてみました。しゅう録時間は１時間で、声を録(と)る人だけがしゅう録ブースに入るそうです。わたしは新聞でこのボランティアを知りましたが、知らない人はたくさんいると思います。まずはこのボランティアを多くの人に知ってもらう活動をしなくてはと思いました。新聞やテレビで取り上げてもらうのが１番だと思います。わたしができる活動では、お友達にこんな活動があるんだよとお話ししたり、書いたこの文をお友達が読んで興味を持ってくれたら良いなと思いました。今回このボランティアに参加したいと思い、申しこみをしましたが、満席で参加できませんでした。次回連らくがあれば、参加して１人でも多くの人の声のお手伝いができたら良いなと思います。

藤田 歩 さん

愛知県・碧南市立大浜小学校５年
意見を聞いた人：母
用いた記事：声のドナー　もう一声
中日新聞 ２０１４年7月27日付朝刊を読んで

授賞理由

藤田さんは、「声のドナー」という記事に出合い、ボイスバンクプロジェクトに申し込むだけでなく、まわりの人に記事の内容を話すなど、記事を通して人と人とを結び、幸せの輪を広げたことから、HAPPY NEWS賞が贈られました。

藤田歩さんと記事を執筆した中崎裕記者（中日新聞）

小学生部門 最優秀賞

島木琴子さんと記事を執筆した稲垣信記者（読売新聞）

島木 琴子 さん

富山県・舟橋村立舟橋小学校５年
意見を聞いた人：母、祖父
用いた記事：生きる 語る 愛情に救われ 母に
読売新聞　２０１４年７月２７日付朝刊を読んで

授賞理由

島木さんは生後間もなく実母と別れた女性が、結婚、出産を経て「要らない子でなく生かされた子だった」と思うようになったという記事を読みました。家族との話し合いを通して、普遍的なテーマである「愛情とは何か」という本質に深く迫っています。自分の考えをまとめる過程を自身の体験に引き寄せ、意見としてまとめ上げました。

中学生部門 最優秀賞

中村真子さんと記事を執筆した中崎裕記者（中日新聞）

中村 真子 さん

三重県・津市立西郊中学校３年
意見を聞いた人：母
用いた記事：妻が、今も人を支えている
中日新聞 ２０１４年７月１６日付 朝刊を読んで

授賞理由

中村さんは妻の臓器提供を決断した会社員の例をもとに、本人の思いを生かすため、生前から家族で話し合うことの大切さを問う記事を選びました。賛否に目がいきがちな難解なテーマですが、母親の意見を聞くことを通じて、中学生の立場から、家族の問題として客観的に深く読みとりました。

高校生部門 最優秀賞

吉冨綾華さんと記事を執筆した杉原里美記者（朝日新聞）

吉冨 綾華 さん

神奈川県・神奈川県立川和高等学校１年
意見を聞いた人：母
用いた記事：卵落下　産まれた創造力
朝日新聞　２０１４年７月５日付夕刊を読んで

授賞理由

吉冨さんは限られた条件で発想力を競う「たまご落としコンテスト」の記事を選びました。小学生の成功率が東大生より上と知り、やる前に失敗を頭で描いている自分に気がつきます。母親との対話から「答えがただ一つでない問いかけだとしたら、失敗を怖がらず自分の言葉を作りあげられるようになるのではないか」とまとめました。

優秀賞

（小学生）

埼玉県	さいたま市立針ヶ谷小学校５年	三木　彩加さん
長野県	松本市立明善小学校３年	音琴　光里さん
新潟県	新潟大学教育学部附属新潟小学校５年	加藤　央己さん
富山県	富山市立鵜坂小学校４年	澤　亮将さん
福井県	福井市宝永小学校４年	亀井　愛乃さん
福井県	坂井市立春江小学校３年	林　尚央さん
岡山県	岡山市立岡山中央小学校６年	増本　雄太さん
高知県	高知学園高知小学校５年	細木　海飛さん
鹿児島県	鹿児島市立武岡小学校６年	帖佐　果歩さん
沖縄県	沖縄アミークスインターナショナル４年	古石　華子さん

（中学生）

埼玉県	さいたま市立植竹中学校１年	平　圭将さん
埼玉県	熊谷市立三尻中学校３年	荒木　七菜子さん
東京都	白百合学園中学校１年	友添　日鶴さん
愛知県	豊田市立末野原中学校１年	志比田　茉菜さん
愛知県	豊田市立末野原中学校２年	伊藤　愛恵さん
福井県	坂井市立三国中学校２年	向野　一空海さん
徳島県	鳴門教育大学附属中学校２年	山根　綾華さん
福岡県	福岡市立香椎第１中学校２年	橋谷　一滴さん
熊本県	大津町立大津北中学校３年	中川　萌々香さん
沖縄県	糸満市立糸満中学校３年	上原　孔子さん

（高校生）

岩手県	岩手県立不来方高等学校３年	立川目　佳子さん
山形県	山形県立上山明新館高等学校３年	渡辺　紗也加さん
東京都	白百合学園高等学校３年	吉川　利黎さん
神奈川県	神奈川県立川和高等学校１年	高　直人さん
大阪府	大阪府立日根野高等学校３年	長田　恵さん
大阪府	関西創価高等学校１年	小池　美華さん
大阪府	関西創価高等学校２年	西　明音さん
鳥取県	米子工業高等専門学校４年	長谷川　仁さん
山口県	山口県立山口高等学校１年	岡村　智聖さん
鹿児島県	鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校３年	木田　夕菜さん

優秀学校賞

（小学校）

宮城県	聖ウルスラ学院英智小・中学校
秋田県	由利本荘市立上川大内小学校
埼玉県	さいたま市立東宮下小学校
東京都	北区立東十条小学校
福井県	越前市武生西小学校

（中学校）

岩手県	宮古市立津軽石中学校
大阪府	大阪国際大和田中学校
和歌山県	和歌山県立日高高等学校附属中学校
岡山県	清心中学校・清心女子高等学校
徳島県	鳴門教育大学附属中学校

（高校）

岩手県	岩手県立不来方高等学校
埼玉県	埼玉県立川越女子高等学校
石川県	石川県立金沢北陵高等学校
福岡県	西南女学院高等学校
熊本県	熊本県立大津高等学校

ゲスト審査員賞

ザ・コラム The column

稲垣 えみ子（編集委員）

アフロの自由　人生は変えられる

ばかばかしいと思う。でも本当のことなのだ。私にもついに訪れたのである。人生における「モテ期」が。

思い起こせば、きっかけは15年ほど前。大阪府警のサツ回りをしていた私は、場末のスナックで開かれた警察官と担当記者の懇親会でカラオケに興じていた。そこに、ソレはあった。刹那的に場を盛り上げる笑いの小道具として。

アフロのカツラが。

元来シャイな性格である。変なプライドもある。ふだんなら絶対にそんなものはかぶらない。だがそのカツラは、オッチャンたちの頭から頭へと回ってきた。コワモテの警察官の面々が、その丸いもじゃもじゃを乗っけると驚くほど可愛いのである。

爆笑していると、私の番が回ってきた。仕方がない。もじゃもじゃに頭をつっこんでみる。「ギャハハ」「似合う似合う」

せっかくなので鏡を借りて、ちらりと確認しましたよ。あら案外イケてる。

それから時は流れ、パッとしない日々が10年ほど積み重なったある日、「そうだ、アフロ、しよう」と思い立つ。いくら何でも社会人としてどうなんですかという美容師の反対を押し切り、平凡な私の頭に、丸くこんもりとした黒い物体が乗っかった。

以来、人生が変わったのです。

行く先々で、見知らぬ老若男女がニコニコと近づいてくる。電車の中、本屋、登山道。「その髪形いいですねえ」「カツラ？地毛？」。握手を求める外国人も多い。

夜、帰宅途中に、スナックやバーから酔ったおじさんが飛び出して来たことが3回、あった。「いっしょに飲もう！」。美人でもセクシーでもない不肖私、50歳を目前にして「ナンパ」初体験である。

さらに、近所の店に入れば「いつ来てくれるのかと思ってました」と大歓迎。1度見たら忘れないせいか、2度目には常連扱いだ。カフェに行けばケーキ、居酒屋の場合は漬物の皿が、「よかったら」の一言とともにスッと登場。ある喫茶店のマダムはなんと、アフロの肖像画を書いてプレゼントしてくれた。

いったい何なんだろうかこの人気ぶり。

もちろん原因は私ではない。アフロである。世の中には奇抜な髪形はあまたあり、もしかするとそういった方々も一斉にモテているのかもしれないが、アフロはちょっと特別なのではなかろうか。

丸くてムダにでかくて、ばかばかしい。歩いているとやたら人と目が合うのだが、ほとんどの人が笑っている。笑われているのかもしれない。それでもいいのだ。私は今、常に笑顔に囲まれているのである。

それにしても不思議なのは、声をかけてくる人がほぼ例外なく「私もやってみたい」と言うことだ。年齢やファッションの傾向に関係なく、みな同じことを言う。これは一体どうしたことか。

疑問が膨らんでいたある日、大阪の路上で信号待ちしていた老女が私の頭を凝視して一言。「ええなあ、若い人は自由で」

自由！　そうか！　イメージは「アフロ＝自由」だったのだ。思い切って髪を爆発させ、その勢いで、うっとうしいしがらみ、閉塞した現実から脱して自由になれたら――みなさんそう思ったんですね。

ふと考える。私は自由になったのか。

本家アメリカでは、アフロはすでに絶滅寸前らしい。2009年のドキュメンタリー映画「グッド・ヘアー～アフロはどこに消えた？」には、雑誌の表紙を飾る白人のようなサラサラ髪を求めてやまぬ黒人女性の今が描かれる。皮膚に悪影響を与えかねない強力な縮毛矯正剤が飛ぶように売れ、巨大な有望市場を形成している。

半世紀前には、同じ黒人社会で、アフロは自由と解放の象徴だった。差別撤廃をめざした運動の熱気の中、生まれつきの縮れ毛をわざと大きくふくらませて「美しいブラック」へと鮮やかに変身してゆく人々の様子は、当時のアメリカに暮らしたフォトジャーナリスト吉田ルイ子さんの著書に詳しい。アフロは、自らを「醜い」と規定してきた人々の意識を解き放ったのだ。

同じ髪形がわずかな時の差で、解放の象徴から克服すべき対象へと一変する。つくづく人間はややこしい。

さて、私である。日本人である私のアイデンティティーとアフロには何の関係もない。数カ月ごとに強力なパーマ液を使って直毛を縮れさせる姿は、我ながら変だ。

それでも確かに、私は自由になったのだと思う。

人生は思いもかけぬ困難の連続だ。社会も閉塞している。成長は止まり、人口は減り、不安を背景に対立は深まる一方。それでも未来は変えていけるはずだ。

足りないのは、行動する勇気なのかもしれない。勇気を支えるのは、他人を信じる気持ちだ。人生は、ともに笑いあえる仲間がいれば何とかなるのではなかろうか。

アフロにしたというただそれだけで、笑顔につつまれ、友達が増え、モテている今、心からそう思う。これはもう一つの奇跡だ。奇跡は誰にでも訪れるのである。

新聞の価値は、紙面にどんな記事を掲載するか、だけではなく、その記事が誰と巡り合うか、によって大きく変わってきます。読者をHAPPYにして初めてその記事はHAPPY NEWSとなり得るのだ、とこの作品を読んで改めて思いました。

小山薫堂賞

小山薫堂
（放送作家・脚本家）

拝啓　稲垣えみ子様

アフロ良く似合います。美容師の反対を押し切り、髪型を変えた決断力、脱帽です。

このころ、私は失業中で、履歴書を郵送しては不採用の繰り返しでした。自分は社会に必要とされていないのではないか、と頭の中でただ考えてばかりの日々を送っていました。

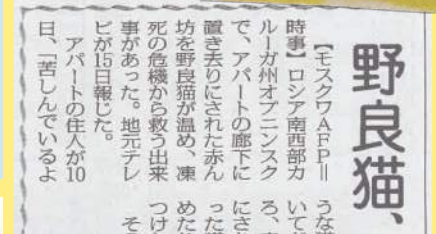
そんな時、稲垣さんの記事を拝読し、思い切ってショートにしました。肩に少しかかるくらいでしたが切りました。人生初のショートとなり、劇的に人生が変わったという実感はありません。でも、とても清々しく、その２か月後に無事に勤め先も決まりました。髪形を変えたから、就職が決まったというわけではありません。しかし、稲垣さんの「人生は変えられる」という言葉に背中を押され、行動を起こすことができたのは事実です。

今後も、多くの困難が私を待ち受けていると思います。そんな時は稲垣さんの、この記事を読み返して前に進みます。

これからもたくさんの人に勇気を！応援しています！！

鈴木 千鶴 さん　34歳　岩手県

朝日新聞 2014年10月25日付朝刊を読んで



野良猫、赤ん坊救う　ロシア

氷点下で数時間温める

【モスクワAFP＝時事】ロシア南西部カルーガ州オブニンスクで、アパートの廊下に置き去りにされた赤ん坊を野良猫が温め、凍死の危機から救う出来事があった。地元テレビが15日報じた。

アパートの住人が10日、「苦しんでいるような猫の鳴き声」を聞いてドアを開けたところ、赤ん坊が置き去りにされ、そばに寄り添った猫がなめたり、温めたりしているのを見つけた。

その日の気温は氷点下。赤ん坊は数時間にわたり放置されていたらしく、住人らは、猫が世話をしなければ助からなかっただろうと話している。駆け付けた救急隊員が赤ん坊を搬送する際、猫は心配そうな様子でついていったという。

赤ん坊は生後2～3カ月とみられ、健康に問題はなかった。警察が親の行方を捜している。猫は「マーシャ」と名付けられ、玄関ホールの段ボール箱に住むことが認められた。

「野良猫、赤ん坊救う（ロシア）氷点下で数時間温める」の記事に目がとまった。アパートの廊下に置き去りにされた赤ん坊を野良猫が温め、凍死の危機から救う出来事だった。夫を亡くし実家に引っ越し間もなくのことで、うれしくて涙があふれ止まらなかった。

駆け付けた救急隊員が赤ん坊を搬送する際、猫は心配そうな様子でついていったという。すっかり赤ん坊のお母さんになっていた猫に脱帽。その後、猫は「マーシャ」と名付けられ、玄関ホールの段ボール箱に住むことを認められ、ほのぼのとした気持ちになりました。

生前、母に子供を道づれにして自殺しては駄目。死ぬ時はあなた一人で死になさいと言われたことがあった。骨太でごつごつした母の体を見て、担当医の方が随分ご苦労なされた方ですねとおっしゃったのを昨日のことのように覚えています。化粧ひとつせず、一心不乱に働き４人の子供を育てた母だからこそ言えた言葉だと思います。今思えばどんなにつらいことがあっても、子供を守るのが母親と言いたかったのでしょう。

暗いニュースが多い中で、人間が失いかけている大切なことを身をもって猫に教わったような気がします。もう野良猫じゃないよ。「マーシャ」ありがとう。

そして、奇跡的に助かった赤ん坊の命。本当のお母さんと幸せに暮らせる日が来るように心から願ってやみません。

佐々木 節子 さん　58歳　宮城県

岩手日日新聞 2015年1月17日付朝刊を読んで（時事通信社の配信記事）

たくさんのひしめく記事の中で、こんなにも小さくてぽっとあたたかなニュースに出合えたことがうれしいです。置き去りにされた赤ん坊の存在そのものがこの世界にとってのかけがえのないHAPPYな存在であり、見捨てるのではなくこの野良猫のようにちゃんとみつけ、寄り添ってあたためていきたい。HAPPY NEWSの存在をあらためて見直した小さな小さな記事でした。

森本千絵賞

森本千絵
（アートディレクター）

町内の家々を回りプレゼントを渡す青年サンタ。（美郷町北郷の岡田さん方）

家々回りプレゼント　イブの夜に青年サンタ

美郷町北郷

うなまんカレンダー製作や清掃奉仕活動など地域の活性化に取り組む、美郷町の北郷青年団連絡協議会（井上智文会長、22人）はクリスマスイブの24日夜、サンタの格好で町内の園児や児童宅を訪れ、プレゼントを配った。

クリスマス恒例の行事で、突然現れたサンタさんに子供たちは驚いた様子だったが、すぐに和み、うれしそうにプレゼントを受け取っていた。

「サンタに扮（ふん）して子供に夢を」と約10年前から訪問を始め、今年は22人の会員が3班に分かれ、子供の人数に合わせ61個のプレゼントを持って24軒を訪問。

宇納間の岡田憲幸北郷商工会会長宅には3人のサンタさんと、トナカイの着ぐるみ姿の会員が訪れ、栄一さん（10）光さん（33）夫婦の長女、栄紗ちゃん（4）にプレゼントを手渡した。

井上会長は、「恒例の行事としてすっかり定着しました。これからも地域に愛され、子供たちに夢を与えられる活動を続けていきたい」と話していた。

miwa賞

５歳まで住んでいた葉山の家にサンタさんが来たことがありました。赤い車に乗って玄関から登場したサンタさんに衝撃を受けたこと、もらったプレゼントが「おままごとセット」だったということまで、はっきりと覚えています。この記事を読んで、私にとっての「サンタ訪問」がよみがえると同時に、同じような体験に大興奮しているであろう子供たちの姿が目に浮かび、とてもHAPPYになりました。

miwa（シンガー・ソングライター）

小さいころ、娘たちはサンタさんがいると信じていた。実際、娘たちのサンタさんは、私たち夫婦だった。もしクリスマス・イブにサンタさんが訪問してきたら、小さいころの娘たちは、どんなに喜んだかと想像がつく。

美郷町北郷の青年たちの取り組みは、子どもたちをハッピーにしてくれる素晴らしい活動である。約10年も継続している活動にも頭が下がる。学生のころ、私はボランティアで地域のイベントを企画・運営をしたことがあるので、地域の活動の大変さはよく分かっているつもりだ。

クリスマス・イブに地域の子どもたちのため、町おこしのために東奔西走する青年たちの記事を読んで、心が温かくなりました。

海江田 秀一 さん　52歳　宮崎県

夕刊デイリー 2014年12月29日付夕刊を読んで

日本の新聞・通信社　日本新聞協会加盟の新聞・通信社です。当協会ウェブサイト（http://www.pressnet.or.jp/）から各社のサイトにアクセスできます。

● 東京地方 / 朝日新聞東京本社 / 毎日新聞東京本社 / 読売新聞東京本社 / 日本経済新聞社 / 東京新聞 / 産経新聞東京本社 / サンケイスポーツ / 夕刊フジ / ジャパンタイムズ / 報知新聞社 日刊工業新聞社 / 日刊スポーツ新聞社 / 日本工業新聞社 / スポーツニッポン新聞社 / 東京スポーツ新聞社 / 電波新聞社 / 日本海事新聞社 / 水産経済新聞社 / 東京ニュース通信社 / 日本農業新聞 共同通信社 / 時事通信社 / エヌピー通信社 ● 大阪地方 / 朝日新聞大阪本社 / 毎日新聞大阪本社 / 読売新聞大阪本社 / 日本経済新聞大阪本社 / 産経新聞大阪本社 / 日刊スポーツ新聞西日本 ● 北海道地方 / 北海道新聞社 / 室蘭民報社 / 十勝毎日新聞社 / 釧路新聞社 / 苫小牧民報社 / 函館新聞社 / 北海道日刊スポーツ新聞社 / 道新スポーツ ● 東北地方 / 東奥日報社 / 陸奥新報社 デーリー東北新聞社 / 岩手日報社 / 岩手日日新聞社 / 河北新報社 / 秋田魁新報社 / 北羽新報社 / 山形新聞社 / 荘内日報社 / 米澤新聞社 / 福島民報社 / 福島民友新聞社 / いわき民報社 ● 関東地方 / 茨城新聞社 / 下野新聞社 / 上毛新聞社 / 桐生タイムス社 / 埼玉新聞社 / 神奈川新聞社 / 千葉日報社 ● 中部地方 / 山梨日日新聞社 / 静岡新聞社 / 信濃毎日新聞社 / 長野日報社 南信州新聞社 / 市民タイムス / 中日新聞社 / 中部経済新聞社 / 東愛知新聞社 / 岐阜新聞社 ● 北陸地方 / 新潟日報社 / 北日本新聞社 / 北國新聞社 / 中日新聞北陸本社 / 福井新聞社 / 日刊県民福井 ● 近畿地方 / 伊勢新聞社 / 夕刊三重新聞社 / 京都新聞社 / 神戸新聞社 / 奈良新聞社 / 紀伊民報社 / 熊野新聞社 ● 中国地方 / 山陽新聞社 / 中国新聞社 / 新日本海新聞社 / 山陰中央新報社 島根日日新聞社 / 山口新聞社 / 宇部日報社 ● 四国地方 / 徳島新聞社 / 四国新聞社 / 愛媛新聞社 / 高知新聞社 ● 九州地方 / 西日本新聞社 / 朝日新聞西部本社 / 毎日新聞西部本社 / 読売新聞西部本社 佐賀新聞社 / 長崎新聞社 / 熊本日日新聞社 / 大分合同新聞社 / 宮崎日日新聞社 / 夕刊デイリー新聞社 / 南日本新聞社 / 南海日日新聞社 / 沖縄タイムス社 / 琉球新報社 / 八重山毎日新聞 / 宮古毎日新聞社

発行　一般社団法人 日本新聞協会
〒100-8543
東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル７階
電話：03-3591-4637
http://www.yondoku.com